

社会臨床ニュース

第39号

2000年7月23日

発行 日本社会臨床学会

〒310 茨城県水戸市文京2-1-1 茨城大学教育学部情報教育講座林研究室

E-Mail: rasen@ipc.ibaraki.ac.jp TEL: 029-228-8314 FAX: 029-228-8314

郵便振替: 00170-9-707357 銀行: あさひ銀行花畑支店(普通) 472-1032602

<http://www.infocul.edu.ibaraki.ac.jp/syarin/>

Homecoming dayとしての社臨総会

菊地 泰博(現代書館・代表)

Homecoming dayという言葉が思い浮かぶのが社臨の総会です。私にとっては、いろんな人に会え、とても懐かしく感じられる日です。日本社会臨床学会とのお付き合いは、社臨未生以前、日本臨床心理学会の頃、学会編の本を作らせていただいて以来です。1979年2月、最初の本『心理テスト・その虚構と現実』が発刊。当時の社会状況の中での日臨心会員の方々の熱のある討論から発想されたものとはいえ、その内容の新鮮さには目の鱗が落ちる思いでした。早速、会員になり、総会に出席したときの驚きは、今でも鮮明に覚えております。それまでの「学会」のイメージとはほど遠く学生運動の中での政治集会の雰囲気でした。

その後、『心理治療を問う』早期発見・治療はなぜ必要か『裁判と心理学』と4冊の学会編、また会員の多くの方々にも単著で本を出していただきました。

しかし、日臨心から社臨に再生した時に、個人的な考えとは別に組織としての齟齬があり、社臨設立以来の会員にはなっており、他の会員の方々との個人的付き合いは別として横浜市立大学で開催された第2回大会参加まで、大会参加には数年間の空白がありました。何となく、いわゆる敷居が高いというひとりよがりの強迫観念に苛まれていたのです(そんな格好のいいことではなく、ただ単に行き辛かったということなのかもしれません)。ともかく、第2回総会で横浜市大から帰った翌日社内で、昨日久しぶりにいろんな人に会え楽しい会だったと話し回っていたのが、思い出されます。

そして、昨年から今年にかけて、会員の方の著書と社臨編の本を出版させていただきました。これで、ようやく、気持ちの上で元の会に戻ったというのが実感です。

昨年末の一冊は、野本三吉(加藤彰彦)さんの『子ども観の戦後史』です。昨年江東区森下文化センターで開催された第7回総会の懇親会の席で、加藤さんと話をしておりました時に、加藤さんが発行している『生活者』を読んで知っておりましたので、加藤さんと私は生年月日が同じですよと話し、同時代体験の話に花を咲かせておりました。それから、数週間後、同時代の人ならこの原稿の意味がわかってくれるだろう、という踏絵(?)のような手紙を頂き、刊行されたのが上記の本です。本書は「既成の子ども観を痛打し、『子ども観』の戦後史をたどりながら『子ども』を機軸に現代の抱える諸問題をもあぶり出し、『子ども』という思想を屹立させ、なかなか刺激的な大作(上野曉氏)と評されるような名著で好評です。

学会編の『カウンセリング・幻想と現実』は今年の第8回総会のメインテーマの本ですのでいまさら何も申し上げる必要もありませんが、社臨設立以来のカウンセリング見直しの研究会の積み重ねの結果が本になったものと認識しております。小沢牧子・中島浩籌両氏が編集代表で制作だけでもほぼ1年掛り、両氏は昨年の夏休みを返上されての原稿読みあわせをなさいました。最終段階になり営業の要請で2分冊に変更していただいたりで、本当にご迷惑をおかけ致しました。改めて両氏に御礼申し上げます。皆さんの苦勞の甲斐がありまして、「心のケアへの疑問(朝日新聞)」と各方面の評判もよく、重版にこげつけております。編集者冥利に尽きるというものです。

長いお付き合いになろうかと思ひます、これからもよろしくお願い申し上げます。

伊豆で風景と温泉を楽しみながら

今年の夏の合宿は、

8月26日(土)～28日(月)

伊豆湯ヶ野温泉です！！

—— 夏の合宿学習会のお知らせ ——

日時) 8月26日(土)午後2時～28日(月)正午
 場所) 伊豆湯ヶ野温泉・国民宿舎「かわづ」
 静岡県賀茂郡河津町湯ヶ野85-1 TEL 0558-35-7111
 伊豆急行河津駅下車(バス15分) FAX 0558-35-7113
 (東京・横浜・小田原や熱海より特急踊り子号でそれぞれ2時間半・2時間・1時間半。河津駅から「修善寺」「河津七滝」行きバスで「湯ヶ野」下車)
 費用) 2万円(2泊4食・夕食時交流会飲み込み・昼食別/1泊2食1万円)

—— 申込みの方法 ——

ハガキ又はファクスで、
 1、社会臨床学会合宿参加の旨明記いただき
 2、宿泊日と27日昼食(+千円)の要否
 3、住所、氏名、電話番号
 他、夕食不要(-3千円)等特記可項があれば記入の上、下記へお送り下さい。昼食は徒歩圏には店がなく、バス15分の河津七滝や河津駅周辺には色々あります。
 ☆受付期間6/20～8/10(必着)
 ハガキ) ☎223-0057
 横浜市港北区新羽町630-2-2301
 FAX) 045-544-8441 広瀬隆士 宛
 問い合わせ先) tel 同上

湯ヶ野温泉は、湯ヶ島から南へ天城峠を越え、河津七滝を過ぎて河津浜へと至る途中の山裾にあります。バスで15分の七滝温泉天城荘の溪谷露天風呂(外来入浴千円・混浴で水着可)には、大滝を眺めながらの7つの露天風呂の他、奥行き30mの洞窟風呂など、計19の露天風呂とプールがあります。七滝めぐりの散策や河津浜(バス15分)での海水浴も楽しめます。国民宿舎「かわづ」には、川に面した露天風呂と内風呂があり、目の前の川原でアユ釣りができます。宿の近くには昔ながらの温泉宿が点在し、ひなびた風情の味わえる散歩路があります。大正ロマンの文人臭がふんふん漂う伊豆の小さな温泉町で、社歴に集う旅人は何を思いながら時代の流れに反対していくのでしょうか。

テーマについては次ページをご覧ください。議論に乗れない方には、上記以外にも散策先がたくさんありますので案内します。



夏の合宿学習会プログラムのご案内

日本社会臨床学会運営委員会

先号でも触れましたが、第九回総会は、来年四月二八日(土)・二九日(日)、札幌学院大学(北海道江別市)で開催することになりました。運営委員会は、井上芳保さん(会員・同大学)に総会実行委員長をお願いし、林恭裕さん(会員・北海道福祉協議会)に協力をお願いしましたが、お二人の関係の広がりの中で、念願の北海道開催が実現していくことに感謝しています。

来る「夏の合宿学習会」は以下のプログラムで開きますが、次回総会を展望しながらこれまでの総会を振り返りつつ、じっくりゆっくり共に語り合いたいと願っています。どうぞ、どなたもご参加下さるようにご案内いたします。

第一日(八月二六日・土) 午後二時～五時および八時～一〇時

本学会編『カウンセリング・幻想と現実』(現代書館)を読む(その二)

先号でも紹介しましたが、同書で「消費社会の神話としてのカウンセリング」を書いた井上芳保さんは、前回総会シンポ発題者として「感情労働とカウンセリング」(石川准さん)と「ピア・カウンセリングを考える」(篠原睦治さん)を批判しながら、支配的文化に浸透した差別と向き合うセラピーの可能性を探る「社会臨床の知」を提言しました。

議論は中途半端で終わりましたが、そのような提言をどう考えるか、「心のケア・癒し」を軸に置いてよいのか、「社会臨床学」という「学」の模索で問題はないか、そもそも「日本社会臨床学会」はどこに行くのか、行くべきかなど、幾つかの大切な課題が改めて問われたと思っています。

今度の合宿では、上記三人の論文を、その著者たちと共に読むことをします。

ご参加の皆さんにも、あらかじめ読みおきいただければと思いますが、まずは、次の三人の方が発題することで討論に入ります。

中島浩籌さん(YMCA高等学院・同書掲載「生涯学習・管理社会におけるカウンセリング」著者)

広瀬隆士さん(三吉クリニック・同書掲載「地域精神医療とカウンセリング」著者)

武田秀夫さん(霞塾)

第二日(八月二七日・日) 午前九時～一二時および午後四時～六時

北海道で考えてきたこと・総会で論じてきたこと

毎回の総会プログラムは、そのときまでの学会誌・学習会・総会等で論じてきたこと、考えてきたことの積み残しを確認して作ってきました。また、“いま、ここで”発言すべき社会的・状況的問題を発掘しながらテーマとしてきました。さらには、開催地域の人々が取り組んできた課題を聞きながら、そことその時までを重ねながら、開催地域の人々と一緒に考える課題を設定してきました。

北海道での総会も、こんな姿勢や方法を大切にしながら、作り上げて行きたいと願っています。その第一歩として、今度の合宿学習会では、冒頭で紹介した林恭裕さんが「北海道で考えてきたこと」を報告します。そして、篠原睦治さんが、運営委員会活動に関わりながら「総会で論じてきたこと」を発題します。第一日目の討論も重ねて、これらの討論の中で、次回総会のプログラムの大枠が見えてくればと期待しているところです。

第二日午後八時～一〇時

交流会

第三日(八月二十八日・月)午前九時～一二時

運営委員会

運営委員のみならず、当日ご参加の皆さんと、次回総会のプログラムの大枠と段取りを決めたいと思います。最後までおつきあい下さると幸いです。

気づかれたと思いますが、自由時間をたっぷり取る等、合宿プログラムは余裕をもって作りました。食事・入浴・散策・おしゃべりなど、楽しんで下さればと思います。

林さんから「北海道で考えてきたこと」を寄せていただきました

一九七九年の養護学校義務化反対の運動から二〇年が経過した。地域でともに生きることを目標に「札幌とともに育つ教育をすすめる会」を結成して、さまざまな障害をもつ子どもの就学問題に取り組んできたが、この間、感じ続けてきたことは、教育が専門性ということに拘泥するあまり、教員が子ども一人ひとりに本当に向き合っているのかということであった。そして、学校がその独自性を失って硬直化しているということであった。

社会が変わり、子どもの生活が多様化しているにもかかわらず、権威に寄りかかった「教育理論」と専門家という意識で、親子と対等なパートナーシップを持とうとしない。しかし、学校は立ち往生しているのである。

私は、職場が社会福祉協議会である。六月に社会福祉法が施行され、サービスの利用者と提供者が対等な関係になることを目的に契約を福祉に導入する。戦後五〇年経ってなおかつ対等な関係を持ち出さなければならないことは、ここにも措置制度をよりどころにした福祉の「専門家」と利用者の一方的な関係がある。福祉は、医療などに比べて専門性に劣ると言われてきた。にもかかわらず、「関係」においては、サービスの選択制に欠ける分だけ、その傾向が強い。そして、福祉現場では、専門性や資格に対する幻想が進行する。

私は、専門家と言われる人々がなぜ、自己の専門性にこだわる余り、「関係」の対等性や「ともに」という関係性が欠落してしまうのかがいつも疑問であった。

夏の合宿では、こんな視点でこれまでのことを振り返ってみたい。